



TITLE:

コンタクト・ゾーンとしてのライフ・ストーリー調査: 非英語圏出身者が英語で質的な聞き取りをおこなうことについて

AUTHOR(S):

酒井, 朋子

CITATION:

酒井, 朋子. コンタクト・ゾーンとしてのライフ・ストーリー調査: 非英語圏出身者が英語で質的な聞き取りをおこなうことについて. コンタクト・ゾーン 2011, 4: 29-43

ISSUE DATE:

2011-03-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/177241>

RIGHT:

コンタクト・ゾーンとしてのライフ・ストーリー調査

——非英語圏出身者が英語で質的な聞き取りをおこなうことについて

酒井 朋子

1 はじめに

本稿では、調査者の第一言語ではない言語（以下、第二言語とする）でライフ・ストーリー調査やオーラル・ヒストリー調査などの質的な聞き取り調査をおこなうときの、いくつかの方法論的問題を議論する。関心の一つは、そうした調査にともなう困難と障害を考えていくことにある。ライフ・ストーリー調査における言語運用能力のインパクトは甚大であり、調査者が研究過程で出会う障害の大きさは、ときとして「第一言語と同様の運用能力がないとライフ・ストーリー調査などではできない」と思わせるほどである。本稿では、私が英語圏でおこなった調査経験をもとに、第二言語でのライフ・ストーリー調査にどのような特性と、困難、あるいは可能性があるのかを考えていきたい。

これと関連して、二つ目の関心は、第二言語で質的な聞き取り調査がおこなわれる場、とりわけ非欧米国の出身者が欧米国で調査をする場における、調査者と被調査者のあいだの力関係とリフレキシビティとの問題である。ここにおけるリフレキシビティとは、調査者の個人的・社会的背景が、研究データの内容や、その解釈・分析におよぼす影響を意味する。本稿は、調査者の言語運用能力すなわち「喋り」が調査者の外部者性を象徴するものとして聞き取りの対話の場につねに介在することを論じていく。そこであらわれてくる力関係の特性は、第二言語での聞き取り調査がもつ可能性をも示していくことになるだろう。

本稿の議論は、調査者が英語以外の、たとえば他の地域言語で聞き取りをおこなうさいの問題とも多くの共通性をもつ。ただし同時に考えなくてはならないのは、こんにちの世界で英語が突出して他の多くの言語に対して有する支配性である。本稿が議論していく調査上の困難や力関係のダイナミクスは、この英語のグローバルな支配性にも関連している。人文社会科学の分野においても英語で情報を発信することに向けた圧力は高まりつつあるが、こうした状況のなか、私たち非英語圏出身者が英語という言語を学び、使用し、教えていくということが何を意味するのか、そこで何が批判的に意識されるべきかという問題が、検討されなくてはならない。本稿はそのような考察にもつながるものである。

以下、第2章では本稿の事例となる私の調査経験の背景を述べ、そこにおいて、私の調査経験がいかなる意味でメアリー・ルイズ・プラットの言う「コンタクト・ゾーン」で

あったのかを記述する。第3章では、じっさいに私がフィールドで直面した困難を紹介し、聞き取りの場がいかに可視的（可聴的）なディスコミュニケーションに満ちたものであったかを述べていく。第4章では、このディスコミュニケーションが調査者―被調査者の力関係にどのように影響するのかを論じ、それを通じて見えてくる、ミクロな対話のなかのグローバルな構造について考察したい。なお、以下では私がフィールドワーク中に聞き取りをおこなった相手は「調査協力者」と記していくものとする。

2 コンタクト・ゾーンとしての聞き取り現場

本稿の議論は、私が2005年から2009年まで英国の一大学に所属しておこなった博士課程の研究、およびこの研究のために英連合王国領北アイルランドで2006年末から2007年の夏にかけておこなったフィールドワークの経験にもとづくものである。北アイルランドは、1920年代にアイルランド南部が英国から独立したさいに英連合王国領に残った土地である。アイルランドは数百年にわたって英国の支配下にあったが、19世紀後半から自治独立に向けた気運が高まったとき、北部で多数派だった英国系の住民（主としてプロテスタント）が自治独立に反対したことから、北部のみ分離されることになったのが、歴史的経緯である。この土地には南部アイルランドとの統一を求めるアイルランド系住民（主としてカトリック）も多数居住していた。土地の帰属をめぐる対立や住民間格差をめぐる確執は、アイルランド分離以後も根深く残り、北アイルランドでは1960年代末に武力抗争へと発展する。北アイルランド紛争と呼ばれるこの武力抗争は以後30年にわたって継続し、1998年ようやく和平協定が結ばれた。

2006～2007年のフィールドワークでは、武力衝突が激しかった時期の生活や経験を人びとがいかに思い起こすのかについて、聞き取りをおこなった。おもな調査地は北アイルランド最大の都市ベルファストである。私は地元の住民センターやコミュニティ・グループにアクセスし、それからスノウ・ボール・サンプリング方式で協力者を探していった。調査協力者の大半は労働者階級居住区に住む人びとで、40代から60代の女性が多かった。北アイルランド紛争で住民対立の主要な軸となるプロテスタントとカトリックの区分で言えば、調査協力者のなかでのその割合は、ほぼ半々である。調査中に聞き取ったライフ・ストーリーのうち、博士論文において主要な分析対象としたのは、24人との聞き取りを録音したデータである。

調査協力者への質問内容は、主として紛争下の日常生活の様子や友人関係、および親や親族から聞いた古い歴史にまつわる話などであったが、それらの内容は暴力的な経験に何かしらの形でかかわるものが多かった。調査協力者のなかには家族や友人を紛争で亡くした人、あるいは紛争中の住民衝突やその恐怖から家を追われたことのある人もおり、聞き取りの場は語り手がへてきた苦難の経験に対する思慮深い対応が求められるものだった。また、私と調査協力者との対話は、「政治暴力の経験者―非経験者」という境界、およびそれにかかわる「私たち」と「他者」の境界をめぐる交渉でもあった。これらの境界は一度として絶対的であったことはなく、つねに対話のやりとりのなかで引かれては消され、

また引かれるということを繰り返す性質のものであった。

暴力の経験を語り、聞くという相互行為における他者性をめぐる交渉は、複雑な緊張に満ちている。現在、多くの社会においては熾烈な政治暴力は常態ではないと考えられている。この支配的価値観のなかで暴力の経験者が自分の経験を語るとき、彼らは心にうったえる存在と見なされながらも、同時に社会的・文化的な他者、異物として恐れられもする[Feldman 2002]。それによるコミュニケーションの断絶は、語り手らにとって生をおびやかすほどのインパクトをもつ[Apfelbaum 2001]。しかしながら他方で、聞き手側が「いま向かい合う相手は自分の想像を超えるような社会経験をしてきたのだ」という考慮をしそこなうことも、また、政治暴力の経験者の声を奪う結果となりかねない[Kirmayer 2003]。他者性の境界をめぐるこのようなセンシティブな緊張のなかにあつて、さらに私の調査においては、対話の媒体である言語そのものがコミュニケーションの障害としてたちあらわれた。それゆえに、私の調査経験はとりわけ困難なものになったといえる。

プラットは、「支配と従属の非対称な関係のなかで異質な文化がたがいに出会い、衝突し、格闘する社会的空間」、すなわちコンタクト・ゾーンにおいて生み出されたものの一例として、20世紀初頭にコペンハーゲンの文書館で発見された一つの写本を挙げる。それは、17世紀はじめにクスコで一アンデス人によって記されたとおぼしき1200ページにもおよぶ文書で、スペイン王フェリペ三世に宛てられ、その内容は、アメリカ大陸の先住民を含むものとしてキリスト教世界の歴史を書き直し、さらにスペインの侵略の歴史をも書き直すというものだった。ケチュア語と非文法的で粗雑なスペイン語の混合体で記されたこの文書は、300年以上ものあいだ大きな関心を払われずにいた。しかし1970年代になって初めて、異質な文化同士の衝突と確執、およびそれを取りまくコロニアルな権力関係を示す興味深い資料として「読むことのできる」ものとしてとりあげられるようになった[Pratt 1992:2-4]。

本稿は、北アイルランドの人びとから聞き取ったライフ・ストーリーを記述し分析した私の研究を、このクスコの写本と同様に「コンタクト・ゾーン」で生み出されたもの、すなわちある種の荒唐無稽さと真実性とを同時に有するテキストであったと見なし、議論していく。もちろん、この研究はイングランドの大学でおこなった博士課程での研究であったから、最終的には英語という単一言語で、質的社会科学の学術用語の文法と論理構造と語彙体系にしたがって、モノリンガルに「読むことのできるもの」としてまとめられた[Sakai 2009]。しかしその研究の過程は、博士論文のなかにも記したことであるが、ほぼ最初から最後まで、調査協力者の語った世界を理解し解釈すべく、私にとってきわめて不透明な（そのさししめすものが無条件に自明ではない）言語媒体と格闘することだった。

フィールド調査にもとづく人文社会科学の伝統的記述において、フィールドにおける困難とは、研究者がフィールドに慣れ、「真正」で「信頼に足る」データを得、適切な解釈の視点を身につける過程で遭遇する一時的な障害物であると見なされている。すなわちそれ自体を論じるような対象ではなく、あとがきや回想録にエピソードとして記されるものなのだ。そこでは、単なる一時的な障害で済むことのなかった、言ってみれば乗り越えることのできなかつた困難については沈黙され、研究は首尾一貫した著作として残されてき

たのである [Kleinman & Copp 1993]。しかしプラットの言うように、現在は解釈的な研究とポストコロニアルな複数主義が著作や研究を「読む」うえでの基盤として登場してきた時代である。だとすれば、私たちと「データ」のあいだに横たわったまま消えなかった障害や、私たちがフィールドを見るときに通さざるをえないレンズの不透明性やゆがみを、あえて可視的に残していくことも、また興味深い結果を生むのではないか。

以下、本稿の前半では第二言語でライフ・ストーリー調査をおこなうさいのさまざまな困難を見ていくことになるが、これは調査協力者の語りについての私の理解が不完全で、とっぴである可能性を示すことになるだろう。しかし、問題となっているのは単に一研究者の未熟さや能力不足ではないように思われる。少なくとも、それだけのものとしてとらえられるべきではない。なぜなら私の研究方法論は、のちに述べるように、民族誌的なフィールドワークの常識をいちじるしく逸脱したものではなかったからだ。したがって本稿で述べていく問題は、多かれ少なかれ広い意味での「異文化」でおこなわれる調査全般にかかわってくる問題なのである。

3 言語にまつわる調査上の困難

ジェイムズ・クリフォードによれば、1920～30年代に人類学的方法論がこんにちに連なるようなものとして確立される以前、19世紀においては、自分たち以外の民族の世界を把握し記述するためには、その土地における長年の滞在と、その文化の包括的な理解が必要と意識されていた。たとえば民族誌家の R・H・コドリントンは、「先住民の生活の真の理解は、十年余りの経験と研究をへてようやく始まると信じていた」のであり、彼の同時代人のなかでは「長年の学習や反転学習の必要性、完璧な言語運用能力を獲得するための諸々の問題」が意識されていたのである [クリフォード 2003 (1988):41]。しかし、その後登場する新しい人類学的方法論は、その立場をとらなかった。たとえば1939年に発表されたエドワード・エヴァン・エヴァンズ＝プリチャードの『ヌアー族』は、「たった十一ヶ月のきわめて困難な調査にもとづいて書かれ」ている [クリフォード 2003 (1988):45]。エヴァンズ＝プリチャードの時代には、「有効と認められる調査は實際上、外国語としての現地語に一、二年慣れ親しんだことを基礎に遂行されうる」という認識がすでに確立されていた [クリフォード 2003 (1988)]。クリフォードは続けて書く。

これと同じ程度のフランス語の知識にもとづいてブルーストを翻訳したとしても誰も信用してくれないに違いないが、にもかかわらずそうなのだ [クリフォード 2003 (1988):46]。

おそらく英語についても同様のことが言えただろう。すなわち欧米においては、英語について「一、二年慣れ親しんだ」程度の知識しかない者が、ヴァージニア・ウルフを、あるいはジェイムズ・ジョイスを論じて誰も信用しなかったであろう、ということである。しかしながら、もし特段著名でない個人個人のライフ・ストーリーと、文学的カノンのな

かにある物語作品との区分を、ここでひとまず脇におくとするならば、これは実のところ私が博士過程での研究でおこなったことに近い。私は1年半～2年ほど英国に暮らしただけの英語会話運用能力でもって、ライフ・ストーリーの聞き取りという、オーラルの言語情報にきわめて依存した調査法を用いて、一つの研究プロジェクトをおこなったのだからである。

もちろん私はそれ以前に中学校、高等学校、大学において英語教育を受けている。さらには大学院進学以降、アイルランドを研究対象としたことから、その後の数年のあいだも日常的に英語に触れていた。だが、それらのほとんどが書き言葉であるのに対し、私が博士論文執筆のための研究において分析の対象としたのはオーラルのデータであった。論文、新聞記事、パンフレットといった媒体での書き言葉と、オーラルな日常会話での話し言葉とは、語彙も違えば情報として流れ込んでくるテンポも違い、使用頻度の高い文法も、その崩れの度合いも、使われる言葉のニュアンスも異なる。その意味で、十数年英語を学んではいたものの、オーラルのデータの収集とその解釈・分析においては、私の英語の習熟度は十分に高いとは言えなかった。

じっさい、1年半程度当地の言語に慣れ親しんだだけの運用能力で質的調査をおこなうという考えは、無謀に見えるものかもしれない。とはいえ私のような事例はとりわけ珍しいものでもない。実のところ、調査をおこなう言語に慣れ、本調査をおこない、その分析によって論文を提出する一連のプロセスで私がとったタイムスケジュールは、留学先であった英国の大学においてフィールド調査をおこなう博士課程院生がたどる、ごく一般的な調査スケジュールだった。他の人類学の院生が、ときとして完全な基礎から言語習得をはじめ、1～2年のあいだにデータ収集や分析をおこなわざるをえないのに対し、フィールド言語を第一外国語として長く学んできていたという点で、私は有利ですらあった。そのためライフ・ストーリー調査という、調査者の言語運用能力に大きく依存した調査法を選ぶことに大きな躊躇はなかったのであり、また指導教員からもその調査方法は了承されたのである。

実際に調査をはじめてみると、調査言語の問題は、まずきわめて大きな障害として経験された。北アイルランドにおける英語の訛りの強さもあって、最初のうちは、聞き取りの現場で相手の言っていることを半分程度しか理解できないこともあった。その後、帰宅してテープ起こしをするにあたって、何度も録音データを聞き返し、初めて理解する事柄が出てくることもよくあった。そうした場合、聞き取りの現場では相手の言うことが十分に理解できていなかったため、録音された対話のなかで私が入れている応答は、すでに相手が語ったことをもう一度聞いていたり、トピックがずれていたり、往々にして場違いである。たとえばある聞き取りでは、調査協力者が昔「誰か」が亡くなった話をしていたのだが、私はそれが「誰であるか」の部分聞き逃しており、話が終わりに近づいてから「その方は近所の方と言いましたか」と聞いて、「違う、私の叔父よ」という答えが返ってくる、ということなどもあった。

こうしたずれや困難は、「同じ言語」と一般的には見なされているが方言や訛りが大幅に異なる地域で調査をおこなう場合、あるいは特殊な語や言い回しを発達させている社会

集団を相手に調査をおこなう場合にも多かれ少なかれ見られるものかもしれない。あるいは私たちの日常的な会話でも、こまかな点が聞き取れないことはよくある。そのさいには、聞き取れなかった言葉を前後の文脈から類推したり、理解しなくても全体の概略が理解できる部分に関しては聞き流したりすることを、私たちは無意識におこなっている。ところが、会話言語に十分に堪能ではない場合、文脈からの類推が困難であると同時に、何がエピソードのポイントをつかむために決定的な情報であるのかを、とっさに判断しそこねることが珍しくない。

このためにフィールドワーク中は、自分の態度やその後の質問を左右しかねない重要な情報を聞き逃すことがあった。たとえば、調査協力者の一人フィオナとの聞き取りの例をあげよう。フィオナが生まれ育った地域は、武力によって南北アイルランドの統合をめざすアイルランド共和主義が支配的な場所であり、彼女の家族もアイルランド共和主義の支持者だった。しかしフィオナ自身は、武力闘争ではなく議会的な手段によってアイルランド系カトリック住民に対する格差や差別をなくそうとする政治主張に共感をおぼえ、その党派活動に参加していた。この活動は彼女のような背景をもつ者としては「奇妙なこと」であるとフィオナは言った。

聞き取りが中盤にさしかかったあたりで、彼女は、この「奇妙な」方向性に彼女を向かわせたきっかけについて触れた。しかし聞き取りの現場では私はその意味をとることができず、聞き返すこともしないままに、そのまま会話を流してしまった。ここで彼女が言っていたことを私が理解したのは、聞き取りを終えて帰宅し、録音したデータを聞き返していたときだった。彼女は、自分が若いときに「親友の一人が突然自殺し」、その経験を通じて、なんであれ人に暴力や死をもたらす方向性で何かを変えようとすることはまちがっていると考えようになった、と言っていたのである。そのフレーズは一度聞き取れてしまえば簡単なものであり、かつ二回にわたって言われてもいたのだが、比較的早口で、ごく小さな声で発せられたために、二回とも私には聞き取れなかったのである。

これに気づいたときに私がまずおぼえたのは、罪悪感である。私は「もし聞き逃していなかったならば、聞き取りの後ろ半分における私の発言や態度は違っていただかもしれない」と感じた。「自分の親友の一人が自殺したことが、その後の自分の政治的方向性に影響をおよぼしている」という言述は、ある真剣さをともなう告白であり、何かしらの感情的な苦難をともなっていたとも推測できる。少なくとも、このフレーズが早口かつ小声で言われていたことから鑑みるに、やすやすと語りにくい何らかのプレッシャーを語り手の彼女が感じていた可能性は高い。もちろん、たとえば友人や家族などにこれまで同じ告白を何度もおこなってきているかどうかによって、告白の行為にともなう精神的な揺れは異なってくるかもしれない。であるにしても、ライフ・ストーリーの聞き取りというセッティングにおいて、研究者が「私はあなたの人生に興味がある」というサインを出し、語り手がそれに答える形で自分の人生を語っているときであれば、この部分は誠実な聞き手としては聞き逃すべきでない部分であろう。私はこの後、フィオナと二回目の聞き取りのためのアポイントメントを取ったが、結局彼女が多忙であったために、二回目の聞き取りは実現しなかった。

この事例からうかがえる重要な点がある。すなわちライフ・ストーリーの聞き取りにおいては、複雑な政治性をはらんでいたり、あるいは感情の確執があるために単純な言葉で語ることができないけれどもストーリー上重要な意味をもつ部分が、しばしば早口や小さな声で語られたり、ぼかして語られたりするということである。聞き取り調査にまつわる通常の方法論では、こうした口調の変化を敏感に察知することが重要と議論される。しかし第二言語で聞き取りをおこなっている場合には、口調のニュアンスを察知するのは容易ではなく、発言そのものを聞き逃す場合もある。この点は、これから同様の調査法を取ろうとしている研究者があらかじめ強く意識しておくべき事柄と思われる。

もちろん、何ヶ月ものフィールドワークを通して言語運用能力は向上もする。私の例においても、テープ起こしのために語り手の発言を一言一句、前置詞や正確な時制にまで気をつけて文字に直していく過程のなかで、フィールドワーク開始当初はトピックやエピソードの概略でのみ理解していた聞き取り内容が、後半には、複雑な感情のレトリックや、聞き手である私への訴えかけも含めて理解できるようになった¹⁾。また、方言や訛りに対する慣れもあって、北アメリカやオーストラリアなど他の英語圏の出身者が一回聞いただけでは理解しなかったフレーズを、私が理解できている、といった場面も見られるようになった²⁾。それでも、フィールド調査を終えて約3年がすぎ、またそのフィールド調査をもとにした博士論文を提出した後も、私の英語運用能力は変化しつづけており、聞き取りデータを聞きなおすたびに新しい発見がある³⁾。

また、ライフ・ストーリー調査において聞き手は「そうですね」「ええ」「なるほど」などの相槌を頻用することになるが、私が英語の聞き取りにおいてとまどったのは、「Yes」と「No」の使い分けであった。よく知られていることであるが、日本語においては否定形の疑問文に対し、否定を認める場合には「ええ」「はい」と肯定の返事を返す。これに対し、英語においては否定形の疑問文に対し、否定を認める場合には「No」、否定を認めない場合には「Yes」となる⁴⁾。この逆転は実際に頭では理解していても、とっさの相槌として出てくるほどに身体化されるまでには一定の時間が必要である。私は聞き取りのさいに、相手に同意する相槌をうとうとして「No」と答えるべきところを「Yes」と答え、相手の問いかけを強く否定する結果となり、困惑した表情をされたり、聞き返されたりしたことがある。同様のことは、うなずく、かぶりをふるという動作についても言える⁵⁾。聞き取り調査の場におけるコミュニケーションのずれは、狭い意味での言語運用能力のみに起因するわけではない。言語と密接に結びついた、表情やジェスチャーとも関係する。

以上、いくつかの例からもわかるように、第二言語での質的な聞き取り調査の場は、極端なコミュニケーション不全によって成り立っていることがある。近年、ライフ・ストーリーとは語り手と聞き手の相互行為からなるものであるとする見方が強まっており、そこでは、語り手は聞き手である私たち研究者の質問に応じて答えを返し、私たちの反応を見ながら、私たちが何を答えとして予期したり、欲しているのかを推測しつつ語りをおこなっていくと理解されている[桜井 2002]。しかし、第二言語での聞き取り調査の場では、この共同行為のキャッチボールがそもそも成立していない場合がよくある。そこにあるのは、投げかけられた問いに答え、その答えにまた深く介入していくといったような呼応関

係ではなく、対話の失敗の感覚と、とまどいと、誤解と、「わからなさ」の感覚に満ちた不協和の関係である。こうした状況における対話としてのライフ・ストーリーは、確かに語り手と聞き手とのあいだの相互作用であり、両者が関与する作業のなかで作られていくものではあるのだが、いかなる意味で「共同的」であるのかは、深く議論する必要があるだろう。たがいが二人で作りに上げていると考えているもの、相手が自分に向けてきたとそれぞれが考えている問いや呼びかけは、おたがいのなかでまったく異なるように想像されている可能性も高いのだ。

しかし、つきつめて考えれば、これは「外国語」での聞き取り調査のみにあらわれることではない。言語運用能力の差異の問題は、背景知識の差異、概念体系の差異、価値判断の体系の差異といった、広義での文化的差異による対話のずれやせめぎあいと、その性質においていちじるしく変わることはないだろう。ただそれらを極端な形で凝縮しているがゆえに、衝撃的な経験として感じられるのである。

以上いくつかの例から見てきたように、第二言語での聞き取り調査はさまざまな困難を抱えている。そこでは調査者が語りの大事なポイントを聞き逃したり、理解が不十分だったりすることも多く、また対話における言葉の投げかけと応答は、しばしば共鳴的ではなく不協和なものになる。これは、たとえば政治暴力の経験のように、語ることにストレスや緊張が生じるトピックを聞き取る場合、語り手にさらなる負担を与えかねず、より深刻な問題となる。では、そのようないくつかの問題にもかかわらず、なぜ当地の言語を第一言語としない研究者が、わざわざそうした研究を選ぶ必要があるのだろうか。たとえば、現地出身の研究者がおこなう聞き取り調査と比べて、何かしらのメリットは存在するのだろうか。この点に関連して、第二言語でのライフ・ストーリー調査の一つの興味深い特性は、調査者―被調査者の関係性についてである。この特性は、現地出身の研究者による聞き取り調査とは異なる視点を、私たちに与えるものである。次章ではこれを考察していこう。

4 二つの方法論的位相

ライフ・ストーリー調査やオーラル・ヒストリー調査などの質的な聞き取り調査法においては、調査者―被調査者の力関係について関心が高い。これは、古くから聞き取り調査法が、強い政治権力をもたない一般人や、あるいは周辺化された人びとなどを対象とし、通常では聞かれにくい経験に声を与えることを目的としておこなわれてきたためだろう。すなわち、周辺化された人びとに力を与えることをめざしてきたために、調査のなかで依然として社会の権力関係が再生産されることに批判的だったのだと説明できる。これらの方法論的な議論のなかでは、調査者が被調査者に対して権力性をもつことが前提あるいは出発点としてとらえられることが多い。そのうえで、研究者がその権力性にどのように向き合うか、その権力性をいかように解消しようと試みるのか、あるいはその権力性が集められたデータにどのように影響しているのかが論じられる傾向にある。

調査者が被調査者に対してもつこの権力性は、他者を書くことをめぐる権力性と、調査

の場のインタラクションにおける力関係という、二つの位相にわけて考えることができる。これら二つは相互に関連することはあっても、異なる問題として検討されるべきである。前者においては、調査者と被調査者とのあいだに存在する力の差は、おおむねはっきりとしたものであるが、後者においては、しばしば力の構造がより複雑になるからである。聞き取り言語が調査者の第一言語ではないという条件は、この双方の位相にかかわってくる。

まず第一の位相について考えてみよう。多くの研究において、語られた話がどのように解釈されるべきかを決定し記述するのは、調査者の側である。口頭で語られる物語は、文字として「書かれた」話に比べ曖昧性を強くもっており、それが「何についての物語」であるかについて、より多義的な解釈が可能である。また、語り手の言葉が調査者のいかなる態度や発言に対する反応だったのかという問題についても、可能性は一つではない。多くの場合、調査者は自分自身の問題関心や主観的判断によって、この複数の可能性を一つへと収束させて記述し立論していく。このとき「書かれたことが真実となり、書かれたことがそのとき起こったこととなる」のだと、ライフ・ストーリー研究者の R・ジョセルソンは書く。「書かれた出来事は、記憶や語りによって伝達されたものより上位の実体性を獲得する」のである [Josselson 1996:60]。この「解釈と記述」のインパクトは大きなものであり、まさにそれゆえに、ライフ・ストーリー調査は他の手法よりも被調査者に対して搾取的になることがある、と S・チェイスは指摘する [Chase 1996]。近年のライフ・ストーリー論は、たとえばジェンダー、階級、出身地、人種などの社会的属性のそれぞれを排他的に分析するのではなく、一つの物語として語られる長いスパンの人生経験を研究の対象とすることで、人びとのより包括的な自己像やアイデンティティを描けると主張してきた ([Hinchman & Hinchman 1997] 参照)。しかしながら、この「全体としての人間像」について解釈、分析、記述をおこなうことで、そのライフ・ストーリーを提供した者を、むしろヴァルネラブルな（傷つきやすい）立場におくことになることとチェイスは議論する。逆に、量的調査のアンケート形式の質問では、質問に対する回答が回答者の生活や人生のコンテクストから切り離されていることが多く、この点において質的調査との比較から批判されることもあるのだが、実はその回答が調査者の側でいかに分析されようとも個々の被調査者への影響やショックが少ない、とチェイスは論じる。

前章で述べてきたように、第二言語での聞き取り調査は語り手とのコミュニケーション不全や、語られた物語についての理解の不十分さを、つねに高い程度で抱え込んでいる。したがって、データの解釈・記述にあたっての調査者側の（必ずしも語り手と共有されていない）主観的判断と、それがもつ力や影響に、大きな注意が払われるべきであろう。ただしこれは、他の民族誌的な聞き取り調査の場合と、程度の差はあれ質的に大きく異なる問題ではないとも言える。

いっぽうで、聞き取りの現場における調査者と被調査者の力関係の位相はもう少し複雑である。こちらも調査方法論の領域では活発に議論されてきた問題であるが、この問題を取りあげた古典的文献としてこんにちまでしばしば引用されるのが、1981年の A・オークリーの論文である。オークリーは、それまでの社会科学研究のなかでは調査者が聞き取りの流れを支配することでより正確なデータが得られるという信念が前提とされてきたと

論じ、そこには調査者―被調査者間に生じる感情や主観性の伝達を無視する「男性主義的な」傾向が見いだされると述べた。そして聞き取りの場においては、調査者と非調査者のあいだに相互信頼にもとづく平等な関係が築かれるべきと唱えた。さらに、こうした関係性は、たとえば女性が女性に聞き取りをおこなう場合のように、同じ社会経験をへてきた調査者と被調査者の組み合わせで実現可能なものであり、そこにおいては「客観主義的」な態度で調査をおこなうよりもむしろ妥当性の高いデータが得られると主張した [Oakley 1981]。

このオークリーの論文は高く評価され、とくに英国においては、その後フェミニズムや質的調査方法論における最重要文献の一つとなった。しかし近年においては単純すぎる見方との批判も向けられている。調査のさいに重要になる研究者の社会属性はジェンダーだけではなく、階級、人種やエスニシティ、出身地、年齢、社会的地位など、さまざまである。たとえばジェンダーなど一つの要素に重なりがあっても、他の要素において大きな差異があれば、聞き取りの場における関係性は非対称になることがある [Riessman 1987]。さらに、聞き取り調査がおこなわれている現場にかぎって言えば、調査者はいつも被調査者に対して権力的な立場にあるわけでもない。被調査者が社会的に認知された立場にある場合には、聞き取りの対話のなかで、調査者はしばしば被調査者に対して従属的な位置におかれることもある。この例はさまざまで、たとえば相手も専門職をもつ人びとである場合、あるいは相手が高齢者である場合である。また、調査先の社会で有色人種と見なされている研究者が白人の人びとに聞き取りをおこなったり、または非欧米圏の出身者が欧米の人間に聞き取りをおこなうといったように、マクロな社会構造のなかでより従属的と見なされる社会集団に属する研究者が、より支配的とされる社会的属性の人間に対し聞き取りをおこなう場合である。たとえば中国出身である N・タンは、子どもをもつ女性研究者の経験について英国と中国で比較調査をおこなったさい、中国の調査協力者とは「同じ立場の人間」として対等に対話ができたという。しかし英国では、タン自身が博士課程の学生であったことも影響し、女性研究者からは「教える対象」として扱われ、子どもをもつ女性研究者として対等に扱われることはなかったと述べる [Tang 2002]。このタンの事例からわかるのは、「被調査者と対等な関係をもつべきである」という主張が研究倫理上の正当性をもつのは、事実上、まず調査者が被調査者に対して社会的に優遇された立場にある場合のみである、ということである。言い方をかえれば、もとより周囲に「手を差し伸べられる」べき地位にあると見られている調査者は、被調査者に対して「上から手を差し伸べる」ことはできない。むしろ、調査社会に助けられ、調査対象者に教えてもらう立場にある。

もちろん、非欧米圏のフィールドにおける人類学的調査でも、調査者が被調査者に対して従属的位置に立つ、という類似の事態は見られる。人類学者は当初はフィールドで子ども同然の扱いを受けるが、通過儀礼をへて、その社会における「大人」として見られるようになる、というのは古典的な理解のありかたである [Geertz 1973]。異なるのは、自分を従属的地位におくフィールドでの価値規範を、多くの人類学者はフィールドを離れたときに相対化できるということである。彼らがデータをもち帰り、解釈し、研究成果を発表

する世界（多くの場合、先進国社会）においては、フィールドの価値規範は支配性をもたない。対して、東アジアから英国に行ってフィールド調査をおこなったとき、私たちが調査協力者に対して従属的な地位においた価値規範は、私たちがフィールドから出た後も、その影響力を必ずしもすべて失わない。タンの述べるところによると、中国では博士号をとれる機会がいちじるしく限られているために、彼女が調査をおこなった中国人女性研究者は誰も博士号をもっておらず、それゆえ英国で博士号をとろうとしているタンは、聞き取り中しばしば羨望を向けられたという [Tang 2002:709]。おそらく、ここには英国と中国の博士号をめぐる制度上の違いが介在しているのだが、その差異は「博士号をもって／もっていない」の区分のなかで忘れられてしまう。これは、英国における制度と価値規範が中国においても一定程度の意味と影響力をもつということを示す事例である。東アジアから欧米に行ってフィールド調査をおこなう研究者にとって、自分を従属的な位置においたフィールドの価値規範は、自国に戻っても完全には相対化しえないことがあるのだ。

さらに、タンが自分の聞き取り調査にとって重要だったと述べているのが、言語の問題である。英国の女性との聞き取りのなかで、タンは質問に用いた単語が不適當あるいは曖昧すぎるとして、しばしば正されたという。彼女はこのつど自分を「劣っている」かのように感じ、彼女の言語能力をめぐるやりとりが、聞き取りの力関係の構築に関係していると感じたという [Tang 2002:714-715]。

私もまた、自分の調査において同様の経験をした。もちろん、タンが調査をおこなった女性研究者は、中産階級以上の階級に属しており、その点で私が聞き取りをおこなった労働者階級の人びとよりも特権的な地位にある。しかし、私が北アイルランドにおける人びとの経験を「研究している＝学んでいる」学生であるということと、私の英語運用能力が発展途上であるということは、聞き取りの場では関連したものとしてとらえられていた。私が日本の出身であり、英国で学んでいるという説明を聞いて、人びとはしばしば、労働移民として北アイルランドに移住してきたアジア系のエスニック・マイノリティのことを話題に出した。私は人びとの経験や語りについて「研究をおこなっている」者というよりは、人びとから「学んでいる」者、そして北アイルランド社会あるいは欧米社会に「溶け込もう・慣れようとしている中途段階の者」であり、文化的に「保護すべき者」としてとらえられていた。そして、ほとんどの聞き取りの場において、私たちの対話は、調査協力者が「教える者」であり私が「学ぶ者」であるという関係性を前提として進んでいった。

タンの事例、および私の経験が示しているのは、コミュニケーションの場で用いられている媒体や言語は、人びとの力関係に影響するということ、さらにはそのコミュニケーションにおいて人びとがどのような「役割」を選び、演じ、担うのかにも影響していくということである。N・モリタが述べているように、英語を第一言語としない東アジア人は、英語圏の国ではしばしば「従属的」で「周囲から学ぶ存在」としての役割を多様な人間関係・友人関係のなかで引き受け遂行していくようになる [Morita 2004]。これは状況が逆転した場合、たとえば西洋から日本を訪れる留学生にとっても、ある程度は該当することかもしれない。けれども英語がグローバル言語として有する支配性は、無視できない要因

と思われる。

強調しておくが、私は自分自身が従属的な立場におかれた関係性をここで批判しているわけではない。むしろ、私が人びとから「学んでいる」という理解は、私自身の認識にも近いものだった。聞き取りの場において、北アイルランド社会、英語圏社会（あるいは「西洋社会」）に対する私の「不慣れさ」は、私の「喋り」を通じてわかりやすく感知できるものだった。それゆえに調査協力者たちが私に対して「教える者」の役割をとりやすかったのではないかということである。一般的に言って、研究者という社会的属性は、社会の他の成員に対する知識面での優位性を髣髴とさせる。それが聞き取り調査の場においても被調査者を緊張させる結果になることも多い。しかし私を前にしたとき、多くの調査協力者は、話題となっているトピックについて私が彼らより「知らない」ことを疑うことなく、比較的にリラックスして、自分の経験について語りえたのではないと思われる。それゆえに、「同じ土地の出身」であり「共有の知識がある」気安さとはまた異なる気安さで、私に対し彼らの人生を語ったのではないかと思うのだ。オークリーの論じたような平等な調査者―被調査者関係は、いまだに社会科学の主流が欧米の中産階級・上流階級の白人男性によって担われていた1980年代初頭の構造のなかで意味をもった理想だったと思われる。以後、多様化していく社会のなかで、女性の研究者や白人ではない研究者、あるいは非欧米圏の研究者の存在が、より可視的になってきた。また、タンや私自身のように、東アジア出身の背景をもちながら、ヨーロッパで聞き取り調査をおこなう事例も以前より見られるようになった。これまで欧米においてはつねに「調査される側」「書かれる側」であった地域、たとえばアジアの出身者が、これまで「研究する側」「書く側」であった欧米社会について調査し記述するようになったのである。私の博士研究も、このマクロで歴史的な研究潮流の変化と密接に結びついている。私が大学院に入学し民族誌な研究を行いたいと思いついた2000年代初頭に、ヨーロッパをフィールドとする人類学がすでに勃興してきていなかったとしたら、私もまた、アイルランドを調査地としては選ばなかっただろう。

このような状況において、調査者―被調査者間の力関係は、より多層的で流動的なものになる。聞き取りの場は、調査者が一方的に被調査者に対し、「平等な関係」の機会を与えるようなものではないのである。

5 おわりに

最後に、これまでの章で議論してきたことをまとめてみたい。

第二言語でのライフ・ストーリーの聞き取りはさまざまな困難を抱えており、その言語を第一言語として使用する者の目からすれば、大きな誤解や誤謬をはらんでいる可能性が高い。けれども、調査者―被調査者間の力関係という視点から見れば、必ずしも研究にとってネガティブな方向にのみ運ぶわけではない。言語のある種の「つたなさ」が「他者」としての、そして「学ぶ者」としての役割を五感で感知しうるものとして場に顕在化させるために、研究者は知識人としての権威性をのがれ、調査協力者がより自由に語りうる空間を作ることができる可能性がある。私が博士研究で聞き取ったような暴力の経験は、そ

の語りを否定されたり、拒絶されたりすることが語り手の自己同一性にとって危機的なものとなりうる [Apfelbaum 2001]。拒絶されるかもしれない空気を感じると、語り手は自身の経験や感情について語るのを避けがちになる。だとすれば、「頭ごなしに否定されることはあるまい」という安心感を語り手に与えられるということは、聞き取り調査をおこなううえでの重要なメリットである。先に言及したように、プラットが『コンタクト・ゾーン』で触れたクスコの写本は、その多言語的で荒唐無稽な記述を通じて、植民地主義の歴史にまつわる権力のせめぎあいや、異質な価値体系同士の遭遇が生み出すダイナミックな想像力を、現在に伝えるものとなっている。これと類似の意味において、ディスコミュニケーション、不完全な相互理解、および力関係の交渉をめぐる緊張に満ちた第二言語での聞き取り調査は、記述する対象あるいは分析する対象の、つねならば隠されている側面をあきらかにしうる可能性をもっている。

言語を学ぶうえでの、「より流暢になるべき」という理想には終わりが無い。私たちが、しばしば第一言語に対してすらも今より流暢になりたいと感じることを思えば、そのことは明らかである。またこの理想は、しばしば「コミュニケーションの相手をより理解する」という対の概念を欠いた、一方向的なものである場合がある。相手の言わんとすることを理解しようとする方向性をつきつめていけば、人は異なるレベルの流暢さにおいて、それぞれに異なる発見を得る。「より流暢になれば、より相手がわかるようになる」というように、一方向的に理解することはできない。

たとえば英語のような、こんにち支配性を強めていく言語を私たちが教える機会をもったとき、学習者に伝えるべきは、「完璧に理解できない、流暢に話せない」という劣等感を払拭するべきだということだろう。同時に、異なる言語運用能力や流暢さでコミュニケーションをとる二者のあいだの力関係を絶対視することなく、分析的に眺める視点を伝えることも重要である。これは、グローバルな潮流のなかでさらに拡大していく英語の覇権性が、同時にミクロな人間関係をも規定していくことに対する、ミクロな現場からの抵抗となっていくはずである。

注

- 1) たとえば、私が博士論文のなかで議論のポイントの一つとしたのは、語りの時制と、暴力を証言するにあたっての「他者性」の交渉との関係性である。幾人かの調査協力者は、聞き取りのなかで、「暴力を経験した私たち」と「暴力を経験してこなかった周囲の人びと」の区分を、時制によって崩す語りをおこなった。たとえば調査協力者のアイリーンは、私が「紛争下の生活がさぞ大変だったでしょう」と言ったのに対し、まず現在時制で、慣れれば普通のことになってしまうのよ、と答えた。それから過去時制で、彼女自身も祖父母の話聞いていたときは、昔の政治暴力の話が恐ろしく、信じられないものに聞こえ、同じ経験をのちに自分がするとは思ってもみなかったが、と言った。ここで彼女は過去時制の語りと現在時制の語りを並置し、現在の自分と過去の自分との差異を、語り手である自分と聞き手である私の経験の差異に対比させている。それを通じて、過去の彼女と現在の彼女が完全に断絶したものではないのと同様、私と彼女のあいだにも、必ずしも完全な断絶があるわけではないことを示唆したのである。本稿の冒頭で触れたように、政治暴力の証言は、政治暴力の外部に立ち続けてきた人びとの心を動かす行為にもなりうるが、同時に証言者が「想像もつかないような暴力的な別世界に生きてきた存在」としてカテゴリー化される危険もはらんでいる。アイリーンの語りは、このカテゴリー化への抵抗として解釈することができる。

- 2) このことが英語教育の現場に示唆するのは、ある言語の聞き取り能力を高めるにあたり、めざす目標とレベルによっては、「言われたことを一言一句理解する」テープ起こし方式のトレーニングが有用になる場合もあるということである。比較的長い語りやダイアログを聞き、概略と要点を理解するトレーニングは、初級・中級・上級とわず、どのレベルの人間にとっても必須である。しかしこのトレーニングのみでは、語りのニュアンスまで理解するようになるのは難しいのではないか。たとえば仮定法を用いたレトリカルな物言いなどを、文法知識を意識的に参照することなく直接音で理解でき、また使えるようになるためには、耳から音として入ってきた文章を、即座に一言一句たがわず再現できるようにするトレーニングが有用ではないかと考える。
- 3) この聞き取りの書き起こしデータについて私が提案したいのは、たとえ語学能力が聞き取りの後に向上し、聞き取り中に話された内容が、最初に書き起こしをおこなったときより理解できるようになったとしても、少なくとも最初に書き起こしをおこなった文字データは、そのまま残しておくべきだということである。のちに修正点があったとき、たとえばパソコン上で書き起こしデータを作っているならば、最初のものとは異なる新しいファイルに保存しておく。これによって、のちに言語能力が変化したときにも、聞き取りをおこなった当時に自分に何が理解できており、何が理解できていなかったのかを、ある程度は推測することができる。
- 4) 簡単な文章で例をあげるとするならば、「会話を録音してもかまいませんか？ (Wouldn't you mind if I record the interview?)」という質問に対し、日本語の場合は「ええ、かまいません」になるが、英語の場合は「No, I wouldn't」という答えになる、というものである。こういったズレが、ライフ・ストーリーの場では、政治について、社会状況について、あるいは語り手の経験についてのコメントを求められる場で生じてくる。
- 5) ジェスチャーについて言えば、「うなずくこと」は話の流れ全体に対する「同意」でもありうるので、相手の直前の質問が否定疑問文だったとしても、それほど不自然な反応とはとられないこともある。

参考文献

- クリフォード, ジェイムズ 2003 (1988) 『文化の窮状——二十世紀の民族誌, 文学, 芸術』(太田好信他訳) 人文書院。
- 桜井厚 2002 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』 せりか書房。
- Apfelbaum, Erika 2001 The Dread: An Essay on Communication across Cultural Boundaries. *International Journal of Critical Psychology* 4:19-35.
- Chase, Susan 1996 Personal Vulnerability and Interpretive Authority in Narrative Research. In Ruthellen Josselson ed., *Ethics and Process in the Narrative Study of Lives*. London: Sage, pp. 45-59.
- Feldman, Allen 2002 X-children and the Militarization of Everyday Life: Comparative Comments on the Politics of Youth, Victimage and Violence in Transitional Societies. *International Journal of Social Welfare* 11:286-299.
- Geertz, Clifford 1973 *The Interpretation of Cultures*. New York: Basic Books.
- Hinchman, Lewis P. & Sandra K. Hinchman eds. 1997 *Memory, Identity, Community: The Idea of Narrative in the Human Sciences*. New York: State University of New York Press.
- Josselson, Ruthellen 1996 On Writing Other People's Lives: Self-Analytical Reflections of a Narrative Researcher. In Ruthellen Josselson ed., *Ethics and Process in the Narrative Study of Lives*. London: Sage, pp. 60-71.
- Kirmayer, Laurence J. 2003 Failures of Imagination: The Refugee's Narrative in Psychiatry. *Anthropology & Medicine* 10 (2):168-185.
- Kleinman, Sherryl & Martha A. Copp 1993 *Emotions and Fieldwork*. London: Sage.
- Morita, Naoko 2004 Negotiating Participation and Identity in Second Language Academic Com-

- munities. *TESOL Quarterly* 38 (4):573-603.
- Oakley, Ann 1981 Interviewing Women: A Contradiction in Terms. In Helen Roberts ed. *Doing Feminist Research*. London: Routledge, pp. 30-61.
- Pratt, Mary Louise 1992 *Imperial Eyes : Travel Writing and Transculturation*. New York: Routledge.
- Riessman, Catherine K. 1987 When Gender is not Enough: Women Interviewing Women. *Gender & Society* 1 (2):172-207.
- Sakai, Tomoko 2009 *Narrating Troubled Lives in Northern Ireland*. Ph. D. Thesis, submitted to the University of Bristol.
- Tang, Ning 2002 Interviewer and Interviewee Relationships between Women. *Sociology* 36(3):703-721.